

厚生労働大臣最優秀賞

第 11 回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
最優秀賞

受賞者名

宮崎大学医学部看護学科
生活・基盤看護科学講座 地域看護学領域

取組タイトル

若者の生きる力を育む性(生)教育

所在地 〒889-1692 宮崎県宮崎市清武町木原5200

電話 0985-85-9843

ウェブサイトURL <http://www.med.miyazaki-u.ac.jp/home/kango/>

取組課題 基盤課題B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」

■ 取組の背景

わが国の20歳未満人工妊娠中絶実施率は、平成13年の13.0(15～19歳の女子人口千対)をピークに令和元年度は4.5で減少傾向にある。宮崎県は平成13年度、増加し続ける若者の人口妊娠中絶対策として従来の大人主導の性教育ではなく、同じ世代の大学生が中高生に実践する「思春期ピアカウンセリング」を導入するため、宮崎大学医学部看護学科に協力を依頼した。(平成19年以降は委託契約を締結し、現在に至る。)

若者が健やかに成長し、自らの居場所を見つけ、自らの意思決定により妊娠・出産するためには、思春期に性の問題に正しく対処できる「性=生」の自己決定能力を育むことが重要である。そのため本学では、大学生をピアカウンセラーと位置づけ、県内各地で中高生を対象に性教育を実施している。

■ 目的および方法

思春期の若者にとって、性教育はよりよく生きるために必要な教育である。我々は“性と生”をテーマに、自分を大切にすること、自分と同様に他者を大切にすること、多様な価値観の存在と尊重について理解することを目的に、教育プログラムを作成し実践活動を展開している。特に、自己肯定感が低いと言われる若者が自身の性(生)に向き合うためには、ありのままの自分を受容し、自分の意思を他者に伝えられることが重要である。そのため、妊娠や性感染症といった知識を一方的に提供するのではなく、性に関する課題の根本となる、自己を受容し将来を考える力や他者と向き合い対等に話し合える関係を構築できる力を育むプログラムを実践している。具体的には、個人ワークで自分と向き合い、まずは自分の考えをしっかりとつ機会を設けている。その後、グループワークで自分の考えを伝えるときともに、他者の考えを聴く機会を作っている。生命の尊さ、自分の存在価値、人の意思・他者の意見を尊重することの意味が理解できるよう、同じ世代の大学生がサポートしている。

■ 成果

① 20年にわたる活動の継続と実績

実施した学校の教諭および養護教諭からは、「年齢の近い大学生が実施することで、教師だと重々しい感じとなる場面でも楽しみながら考え、学ぶことができていた」といった感想を頂くなど好評を得ており、その伝承により継続的な実施につながっている。本活動は大学生においても社会人基礎力を育む上で有意義な活動となっている。活動は先輩から後輩へ継承されるのみならず、中高生の時期に受講した生徒が大学生になり活動を展開している。

② 受講生の声

20年以上にわたり本活動を継続し、実施した中学校及び高等学校は延べ150校にも上る。その間、受講した生徒からは、「普段、学校で学べないことや親に聞けないようなことも学べたので、とてもいい機会だった」、「これからは、自分の考えだけを言ったりせずに、相手や他の人の意見も聞こうと思った」、「自分の命を今まで以上に大切にし、しっかりと生きていきたいと思った」など、様々な感想が寄せられた。知識の付与ではなく大学生とともに学び・考えるという経験が、自己を受容し、他者と良好な関係を築く力を育む一助になっている。

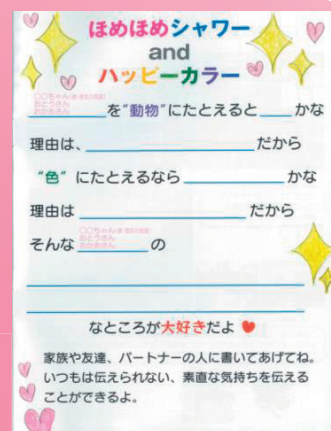
■ 今後の展開

本活動は、これまで県内延べ約150校で実施実績があるものの、実施時期の調整等から県内すべての中学校及び高等学校での実施には至っておらず、今後の課題としたい。

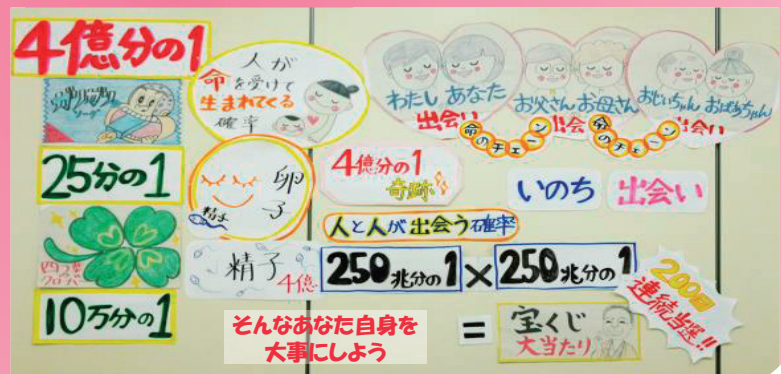
また、受講した中高生が、この講座での気づきを自分の財産として大切に育み、そのエッセンスを次世代につないでくれることにより、望まない妊娠により辛い思いをする人々を減らすことに貢献したい。



恋愛に対する価値観：グループワークを通して、お互いの価値観を認め合う。



若者の生きる力を育む 性（生）教育



コンドームの使い方
“性＝生”の自己決定に予防は重要



生命の尊さを知る。そして、自分と向き合う。

第11回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
優秀賞

受賞者名

群馬県

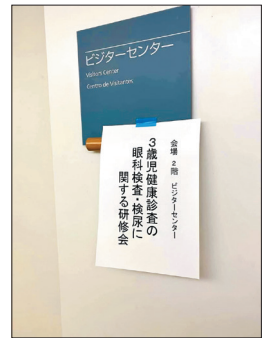
取組タイトル

「ストップ! 弱視見逃し」3歳児健診における弱視の早期発見と学童期へと繋がる子どもの視機能を守る取組み～地域保健福祉・県教育委員会・県医師会・県眼科医会の連携～

所在地 〒371-8570 群馬県前橋市大手町一丁目1番1号 電話 027-226-2606

ウェブサイトURL https://www.pref.gunma.jp/03/bm01_00032.html

取組課題 基盤課題A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」
基盤課題C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」
重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」



研修会の様子

取組の背景

弱視の子どもの数は約50人に1人。弱視治療にはタイムリミットがある。感受性期に正常に脳の視覚領域が発達しなければ、生涯弱視になってしまうため、手遅れにならないよう、弱視は3歳児健診で発見し治療を開始すべきである。弱視の検出率を上げるには、屈折検査の導入が有用であるが、予算や人員などの問題から導入を見合わせている自治体も多い。当県においても、導入状況には地域差があり、弱視見逃しが課題となっていた。

また、屈折検査を導入している自治体においても、屈折検査で異常と判定されたが眼科精密検査未受診となっているケースがある。健診で障害克服のチャンスを得られたにもかかわらず、治療に繋がらない児を減らすことは極めて大切であり、学校保健安全法に基づく園・学校等における健康診断での弱視児を発見し、治療に繋げていく必要がある。

取組のねらい・目標

- ・地域格差をなくすため、健診に関わる地域の関係機関が協働して全県下で屈折検査を導入し、県単位で精度管理を行う。
- ・健診担当者が視覚発達や弱視に関する知識を獲得し、屈折検査機器などの検査技術を習得する機会をつくる。
- ・保護者が子どもの弱視についての知識を得て、早期発見・早期治療に対し積極的に行動できるようにする。
- ・学校健診での視力検査において弱視の見逃しがないように、眼科学校医と協力して検査の精度向上を目指す。

取組内容

県眼科医会から県への「3歳児健診における屈折検査の必要性を訴える要望書」を受け、県医師会、県眼科医会、地域医師会、視能訓練士会、市町村で構成する国内で初めての検討会議を発足させ、「3歳児健康診査における眼科検査の手引き～弱視の早期発見のために～」を作成、屈折検査の導入を推進した。

検討会議では、市町村からの健診結果をもとに、弱視検出率などを毎年分析している。その結果を市町村や郡市医師会にフィードバックすることで、各自自治体での精度向上のインセンティブとなっている。

また、県眼科医会の医師による保健師対象の研修会を平成29



研修会の様子

年度から継続的に開催している。全市町村を対象に継続的に研修を開催している県は他になく、市町村からの相談や質問も県が窓口となり、眼科医に繋いでいる。

さらに、3歳児健診で弱視治療に繋がらなかった児を発見するため、県教育委員会と県医師会、県眼科医会からなる検討委員会において、令和3年に「幼児・児童生徒の眼科健康診断の手引き」を改訂、弱視を見逃さないための視力検査方法などを明記した。

取組の評価

平成28年度以前、3歳児健診で屈折検査を導入していたのは4市町村であったが、令和2年4月までに県内全35市町村での導入に至った。また、要治療検出率は、導入前の0.1%から、2.2～2.8%へと大きく改善している。

精検対象児のうち、令和2年度の眼科精密検査未受診率は22.5%であり、全国調査よりも低い割合であった。屈折検査で異常があった児の未受診率は7.0%、屈折検査以外で異常があった児の未受診率は15.5%であったことから、屈折検査での客観的な評価により受診に繋がっていることが推測される。

今後の課題

- ・精密検査対象児の眼科未受診率を減らすための取組を強化する
- ・家庭での視力検査の検査可能率を上げるための方法を検討する
- ・乳幼児健診と学校健診との連携強化を図る

3歳児健康診査における眼科検査の手引き～弱視の早期発見のために～	目次
1 総論	1
2 3歳児健康診査における眼科検査の目的	2
3 3歳児健康診査のフローチャート(案)	3
4 3歳児健康診査の手引き	4
5 3歳児健康診査の手引き	5
6 3歳児健康診査の手引き	6
7 3歳児健康診査の手引き	7
8 3歳児健康診査の手引き	8
9 3歳児健康診査の手引き	9
10 3歳児健康診査の手引き	10
11 3歳児健康診査の手引き	11
12 3歳児健康診査の手引き	12
13 3歳児健康診査の手引き	13
14 3歳児健康診査の手引き	14
15 3歳児健康診査の手引き	15
16 3歳児健康診査の手引き	16
17 3歳児健康診査の手引き	17
18 3歳児健康診査の手引き	18
19 3歳児健康診査の手引き	19
20 3歳児健康診査の手引き	20
21 3歳児健康診査の手引き	21
22 3歳児健康診査の手引き	22
23 3歳児健康診査の手引き	23
24 3歳児健康診査の手引き	24
25 3歳児健康診査の手引き	25

手引き目次

第11回



健康寿命を
のばそう！
AWARD
優良賞

受賞者名

札幌市白石保健センター

取組タイトル

多職種コラボで若年ママを応援！

所在地 〒003-8612 北海道札幌市白石区南郷通一丁目南8-1 電話 011-862-1881

ウェブサイトURL <https://www.city.sapporo.jp/shiroishi/index.html>

取組課題 基盤課題A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」
基盤課題C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」
重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」
重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

取組の背景

札幌市では、令和元年度に2歳児の虐待死事件が発生したが、当該児の母親は若年(10代)で出産した事例であった。若年での妊娠・育児においては、妊娠期から保健師が家庭訪問し、産後も育児支援を継続しているが、置き去り等のネグレクトが疑われるような事例の発生が後を絶たず、原因として育児知識の不足が考えられた。

そこで、まず若年妊婦・若年ママの特徴を知るために調査を行ったところ、中学校卒業程度の学歴の者が40%程度いることがわかった。また、小学生の頃から不登校だった者もあり、読解力や語彙力が未熟であることや、活字を読むことになじみがない者が多いこと、わからないことがあったときに「調べる」「検索する」という行動をとる者も少ないことがわかった。

白石保健センターでは、今までも初妊婦全員に、妊娠期～1歳頃までの育児知識を載せたテキストを配布してきたが、若年ママには活用されていないことがわかったため、若年ママの興味を引き、わかりやすく育児知識を伝える方法について、保健師・管理栄養士・保育士で検討を行い、新たな資料を作成することとした。

取組のねらい・目標

本取組のねらいは、若年ママが育児知識を得て適切な養育行動をとれるようになることであり、虐待事例および虐待が疑われるような事例の発生を防止することを目標としている。

取組内容

若年ママが楽しく育児知識を得られるように、若年ママが興味を持ち、読んでみたいと思える資料を作成することにした。活字を読むことに慣れていないという特徴があることから、コンパクトでわかりやすい文言を用い、かわいらしいイラストを多用し、漢字にはすべて読み仮名をふった。また、スマートフォンを持っても、料金滞納等により頻繁に使用不可になる事例もあったことから、あえてデジタル機器を用いない資料にすることとした。

保健師が若年ママを支援するなかで気づいた「育児のつまづきポイント」のうち、「離乳食」と「イヤイヤ期」に焦点を当て、両ポイントを乗り切ることを目的に、児の月齢で3期に分けて資料を作成し、保健師が訪問時に配布することとした。

① 第1期：新生児期～生後4か月頃に配布

保育士の発案で、冊子形式ではなく、情報を立てかけておいて、片手で引き出して読める形態にした。Q&A形式で基本的な乳児期の育児情報を知ることができるようにするとともに、管理栄養士が作成した、写真を多用した「かんたん離乳食」の資料についても、離乳食の進み具合に応じて配布することとした。



② 第2期：1歳頃に配布

散歩をしているときや他児と関わる時などの具体的な場面を通して、子供の精神発達の理解を深めることができるように、場面ごとの短い絵本を3冊作成した。

③ 第3期：1歳6か月頃に配布

Q&A形式とし、具体的なイヤイヤへの対応についてコンパクトに説明した。母子で一緒に遊べる「絵合わせカード」も添付することにした。



今後の課題

若年ママによる虐待防止を推進するためには、育児知識の習得支援だけでなく、育児負担を感じた際に気軽に預けられる場の創出(リフレッシュへの支援)など、包括的な育児支援が必要である。若年ママに寄り添ってニーズを把握しながら、ひとつずつ支援体制を整えていきたい。

第11回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
優良賞

受賞者名

LUCKY industries

取組タイトル

障害児支援プロジェクト

所在地 〒503-2423 岐阜県揖斐郡池田町青柳83-8

電話 0585-45-3131

ウェブサイトURL <https://lucky-industries.jp/kaigo/>

取組課題 重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」

取組の背景

「おんぶひもを特別に作ってほしい」ママからの1本の電話から様々な状況を知る事になりました。

抱っこひもは3歳まで使用できる物が一般的ですが、実際に障害をお持ちのお子さまを育てる中で3歳以上のお子さまを抱っこする機会は非常に多いことなどを知り、私達の福祉事業への取り組みが始まりました。

目的

育児を“もっと”楽しく、新しく

この言葉は全てのご家庭のためにあるものです。

この想いが実現できるように、特別支援者向けにカスタムオーダー抱っこひもを含む福祉製品に取り組んでいます。

対象者

障害がある3歳～成人

方法

お子さまが通われているリハビリ施設に行き、お子様と理学療法士・作業療法士と一緒に試着を行いお子さまにあった抱っこひもを作成します。

カスタムオーダーイメージ

基本仕様

両肩紐の長さ、腰ベルトの長さ、背広の幅などを調整できます。抱っこひもは、赤ちゃんの成長に合わせて、肩紐の長さや腰ベルトの長さ、背広の幅などを調整できます。

おもて面

うらも面

肩(もも)受け
肩紐が2段階で
変更できます。(1段階)

カスタム仕様

①ヘッドサポートの変更
赤ちゃんの頭の大きさに合わせて、ヘッドサポートの幅や高さ、形状などを調整できます。

②腰ベルトの調整
赤ちゃんの腰の大きさに合わせて、腰ベルトの幅や長さ、形状などを調整できます。

③肩紐の調整
赤ちゃんの肩の大きさに合わせて、肩紐の長さや形状などを調整できます。

肩紐(肩紐タイプ)

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

収納部

仕様・料金

抱っこひも基本仕様

本体(基本仕様サイズ)+肩紐+ヘッドサポーター+腰ベルト(両側)+バックル(両側)+調整ベルト(両側) **¥36,000(税込)**

本体(基本仕様サイズ)

背広幅	身長	身長目安	身長から身長差
A5101	3～5歳	90～110cm	39cm
A5111	4～6歳	100～120cm	43cm
A5121	5～8歳	110～130cm	47cm
A5131	7～10歳	120～140cm	51cm
A5141	9～12歳	130～150cm	55cm
A5151	成人	150cm以上	63cm以上

生地(カラー)

生地	カラー
T/C デニムバック (ポリエステル65% 綿35%)	ナロニップバック (アイロニップ100%)
T/C デニムナイビー (ポリエステル65% 綿35%)	ナロニップナイビー (アイロニップ100%)
メッシュバック (ポリエステル100%)	メッシュバック (ポリエステル100%)
メッシュナイビー (ポリエステル100%)	メッシュナイビー (ポリエステル100%)

※生地柄・カラーは1段階異なる色に異なる場合があります。

カスタム価格

仕様	価格
本体のサイズ変更(1段階につき)	3,000(税込)
肩紐の長さ変更(1段階につき)	5,000(税込)
腰ベルトの長さ変更(1段階につき)	4,000(税込)
バックル(2段階につき)	3,000(税込)
調整ベルト(メッシュバック)	1,000(税込)

※上記はカスタムオーダーイメージです。その他の内容はお問い合わせください。

※上記の仕様・料金・価格・送料は税別です。その他の内容はお問い合わせください。

また弊社ホームページよりレンタルも行っていますのでお気軽に試着する事もできます。

成果

カスタムオーダー抱っこひもの実績は約300件以上になります。

今後の展開

全国のお困りの方々に私達の取り組みを知っていただきたいです。

抱っこひもを通じてお子さまとの大切な時間を今よりももっと楽しい時間になるお手伝いが出来ればと思います。



第11回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
優 秀 賞

受賞者名

Nっ子ネットワーク カンガルーの親子

取組タイトル

極低出生体重児・超低出生体重児家族会の
ピアサポート活動

所在地 〒818-0056 筑紫野市二日市北1丁目12-15-101号室 (mamma mano内)

ウェブサイトURL <http://n-kan-oyako.moo.jp/>

取組課題 基盤課題A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」
基盤課題C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」
重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」

「Nっ子ネットワーク カンガルーの親子」は、低出生体重児の家族会です。(発足当時は、「Nっ子クラブ カンガルーの親子」という名称でスタート)。

代表・登山は、2006年11月、第2子を在胎週数23週1日452gで出産。NICU退院後、保健師の家庭訪問の際、家族会を作りたいと相談したことをきっかけに、福岡県筑紫保健福祉環境事務所の協力を得て、同じ時期にNICUに入院していた同保健所管轄内に住む母親3人で立ち上げました。会の名前の、「Nっ子」はNICUのN、「カンガルーの親子」は、やっと我が子を胸に抱くことができたカンガルーケアから名付けました。

2007年11月16日に第1回定例会を開催、9組の親子が集まりました。この日を会の発足日としています。以降、月1回の定例会(現、カンガルー広場)を軸に集まり、悩みや喜びを共有したり、学習会を行ったりしています。今年、会発足15周年を迎えます。2022年8月現在、125家族の登録があります。

主な対象は、特にハイリスクと言われる1500g未満で生まれた子どもたちとその家族。登録メンバーの約半数は1000g未満で生まれた超低出生体重児です。500g前後で誕生したお子さんも多数います。順調にキャッチアップしていくお子さん、脳性麻痺、医療的ケア児、発達障害など障害が残るお子さん、残念ながら亡くなるお子さん等様々です。



病院主催のNICU卒同窓会や自治体が開催する低出生体重児を対象とする教室と違い、居住区、病院、年齢の制限はありません。2500g未満で産まれる赤ちゃんは、約8.1%、1500g未満は0.6%、1000g未満だと0.3%とその割合はぐんと下がります。1000g未満の赤ちゃんは自治体によっては年間一人とか二人という出生数で、近くに同じように小さな赤ちゃんを産んだ人がいないということもあります。中には、お母さんが地域の保健師に不安を相談しても、「1000g未満の赤ちゃんを担当したことがなく、よく分からない」と言われた方もいるほどです。会発足時と比べると、格段にSNSが発展し、同じような体験を持つ人とながかることは簡単になりました。

それでも、「直接、先輩ママの話を聞いてみたい」と、現在も問い合わせがあります。

会の集まりに初めて参加した方の多くは驚きます。こんなにも同じように小さく生れた赤ちゃんがいることに。そして、安心してお子さんの状態を話し出します。今まで親戚・友人に話しても理解してもらえなかった不安、そして、普通の出産であつたら気にならないような喜びも共感してくれる仲間がいるのです。



活動の基本は「傾聴」・ピアカウンセリングです。集まって話をする 것과平行して、安心と安全の確保のため傾聴講座も行い、学びと平行しながら活動を展開しています。

北九州、柳川での出張おしゃべりサロンに参加したお母さんたちが、地域でも集まりたいとグループが誕生。そこで、2017年、発足10周年を期に会の名前を「Nっ子ネットワーク カンガルーの親子」と変更しました。(北九州：Nっ子ネットワーク さんっ子、柳川：Nっ子ネットワーク わかば-絆-)

コロナ禍に入った2020年3月、一時、活動をストップしましたが、4月以降、ZOOMやLINEオープンチャットを活用しての活動が中心になりました。今まで距離的な問題で参加できなかった方やお子さんに医療的ケアなどがあり移動が大変だった方が参加できるようになったというメリットもあります。

今後は対面とオンラインの併用の集まり、そして対面での小さな集まりへと移行できたらと模索中です。

第11回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
優良賞

受賞者名

なかい歯科クリニック

取組タイトル

マイナス一歳からの口腔育成と食の大切さを学ぶ食育カフェ 「Oyako食堂 ごはんの樹」

所在地 〒306-0434 茨城県猿島郡境町上小橋 電話 0280-87-8825

ウェブサイトURL <https://nakai-shika.jp/>

取組課題 基盤課題A「切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策」
基盤課題B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」
基盤課題C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」
重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」



取組の背景

歯科において、平成の時代以降「予防」をキーワードに、う蝕予防、歯周病予防の概念が定着し、それぞれの地域や医療機関において「予防のプログラム」が確立されたことで、う蝕罹患率も右肩下がりに減少し、子ども達の口腔保健は保たれているかと思えます。しかし、私達歯科医療従事者は、臨床の現場で「うまく噛めない子ども達」「食が細く体重の増えない子ども達」「発音のうまくできない子ども達」にしばしば遭遇します。虫歯や歯周病予防に主眼をおいた口腔衛生だけでは、口腔の健康な成長発育を叶えることは不十分であることに気づかされたのです。

私達は、地域の子どもの健康に育ち、やがて大人になった時にQOLの高い生活を送ることができるよう、単に虫歯や歯周病の予防だけでなく、「よく噛める」「食べられる」「ちゃんと飲み込める」「正しい呼吸ができる」ようになるためのお手伝いをしたいと思いました。

目的

茨城県境町では、手厚い子育て支援事業計画のもと、子ども達が安心、安全にそして質の高い生活を送るための事業が数多く展開されています。その中で、町の保健センターの付帯施設として建てられた店舗において当院が母体となり、歯科医療従事者他、多職種が連携し、授乳期、離乳期、幼児期、学童期とそれぞれのステージにおける口腔育成を、診療室での臨床的アプローチと食育カフェでの食事指導や個々に合わせたプログラムとして実践し、町と医療者が一体となって、核家族化の中で子育てに悩むママ達と地域住民の懸け橋となり、みんなが集える「町の保健室」の役割も果たして行きたいと考えています。



対象者

妊娠期から授乳期、離乳期、幼児期学童期の子ども達とその家族、地域の中高齢、高齢者、口腔育成を学びたい医療関係者など。



方法と特徴

ランチタイムに離乳食前期から中期、後期、幼児食、大人食とそれぞれのステージに合ったメニューを提供し、歯科食育指導士の資格を有する歯科医師、歯科衛生士、管理栄養士が、妊娠授乳期の母親への指導、健康な口腔を育成するための離乳食の食べ方

の指導、食の悩み相談などを行っています。また、私達が推奨する、赤ちゃん主導の「手づかみ食べ」や歯科医師が考案した「お口が閉じるスプーン」での口唇閉鎖の促し、管理栄養士からのメニューの提案もしております。

また、食の大切さ、有難さを啓蒙するための取組として、「親子農業収穫体験」「かむかむ料理コンテスト」「親子歯育て教室」などを定期開催しております。これらは医療従事者だけでなく、地域のボランティア団体の皆様のお力もお借りし、まさに、「地域で地域の子どもの健康を育てる」ことを発信し、孤立する子育てママ達をとり残すことがない様、また、地域に健康意識の高い人達を増やし、口から始める健康教育を多世代で広げていきたいと思っています。

親子にとっては少しハードルの高い歯科診療室を飛び出して、気軽にお口の健康を学べる場として評価を頂いております。お店の前には、町が運営する全天候型公園があり、汗をかいて泥だらけになった子ども達がお腹を空かせて入ってきます。

「食べることは生きること」をまさに子ども達が生き生きと実践してくれる場所であることを嬉しく思っています。

地域貢献

「Oyako食堂ごはんの樹」が主催する、各種イベントや母子セミナーなどはすべて無料で行い、地域住民のデンタルIQの底上げと健康意識の向上に努めます。

成果と今後の展望、私たちの願い

「口は健康の入り口」「食べることは生きること」を地域住民、そして国民全体が深い認識を持って歯科での継続的管理を続ける事こそが、健康寿命延伸の大きなカギになると信じています。口腔の二大疾患である虫歯と歯周病の予防だけでなく、乳幼児期からの口腔育成プログラムが超早期予防として、口腔と全身の健康の礎となることを伝え続けていきたいです。

「偏食が改善された」「子どものいびきが治った」「集中して食卓に向かうようになった」「スムーズに卒乳できた」など、子ども達の嬉しい変化を報告してくれる保護者の方や、「ごはんの樹でできたママ友と交流を深めている」「家族全員で歯の健康に気を付けるようになった」など、気持ちにも変化が現れた様子をお話くださる方もいらっしゃいます。

カメの歩みではありますが、地域の親子への啓蒙から、少しずつでも「口から始まる全身の健康」が国民全体に浸透し、これからも歯科分野が健康寿命の延伸に寄与できる事を願います。「食の大切さ」「食の楽しさ」を存分に子ども達に感じてもらい、日本の食卓が笑顔で満ち溢れることを願っています。

第11回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
優良賞

受賞者名

NPO法人子育てパレット

取組タイトル

ママの孤立防止支援策

所在地 〒121-0816 東京都足立区梅島3-4-8 うめじまKSビル2F

電話 03-5888-6943

ウェブサイトURL <https://kosodatepalette.jimdo.com>

取組課題 基盤課題C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」

当団体の現場感をはじめ産後ママへのアンケートでも9割近いママが「孤独感・孤立感を感じている」もしくは「感じたことがある」と答えています。

結婚して、子どもが生まれて幸せの絶頂な時期のはずなのに人生最大とも言える孤独感・孤立感を感じる。

それは、子育てママが不安や迷いを口にした時「母親だから頑張るなさい」「母親なのに」と責め、黙って頑張ることを賞賛し「矯正」されているような事態がまだ日本の社会に根強く残るからです。

ママになった途端、ひとりの人間を育てる重責に押し潰されそうになりながらも1人で頑張る、心のままの気持ちを話すことを封印していくしかなくなってしまう現状。

地域社会がママに寄り添わなければ子育てはうまくいかず、健全な子どもが育つ明るい未来へと繋がりにくいのではないのでしょうか？

私たちは24時間365日の電話相談からはじめ、公式LINEでの相談、行き詰まったママの駆け込む場所の機能も兼ねた「マタ



ニティ&ベビーハウスOhana」という場所で多くのママたちの子育てや不安、迷いに寄り添ってきました。

「赤ちゃんを育てる自信がなくて、捨ててしまいたい」という方も何人もここに駆け込んできました。

行政や関係機関には話さないことを私たちに話してくれることで適切な対応ができることも多々ありました。このような行政と民間がタッグを組み、「ママになったら」先ずここを頼って、気持ちを素直に吐き出すこと。声に出してさえくれば行政や関係機関に繋ぐことができる、それが民間の私たちの柔軟さと自負しております。

私たちの団体は、いわばプラットフォームのような存在。妊娠期・乳幼児のママがメインの対象で、はじめての子育てやはじめての兄弟育てに不安や迷いを抱えた時に立ち寄り、そこから前を向くことができれば、保育園や幼稚園等の新たなステージへ進んでいきます。

「ママもきつい時に声をあげていいんだよ」、それを聞いた周りは優しく受け止め、手を差し伸べる社会へと変えることで、一度挫けた子育てにもう一度ママが向き合うことができれば児童虐待やネグレクトなどの数は減らせると信じてやみません。

「大丈夫、ひとりじゃないよ」を具現化する意味でママの孤立防止のシンボル・ドットリボンも活動の中で作りました。

オレンジリボンは子どもを守る視点、ドットリボンはママを守る視点、そこに暴力防止のパープルリボンを加えて輪で回していく社会を理想とし、確立に取り組んでいます。

啓蒙だけでなく相談・居場所のリアルな実のある活動の両面からママ・子育て支援に取り組んでいます。



厚生労働省子ども家庭局長賞 団体部門 優良賞

第11回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
優良賞

受賞者名

一般社団法人あだち子ども支援ネット

取組タイトル

ほっとステーションプロジェクト

所在地 〒121-0062 東京都足立区南花畑3-9-19

電話 03-3884-5125

ウェブサイトURL <https://adachi-kyodo.genki365.net/G0000437/>
https://peraichi.com/landing_pages/view/kodomocienn2915

取組課題 基盤課題C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」

子ども達との日常の遊びから子ども達の育ちの背景に保護者が置かれている生きづらさや社会からの排除、家庭まるごとの環境がある。子ども達の声を聴こうとすればするほど母子関係、家庭、親子間の健全な生活環境が必須であることを考えさせられました。これからも民間と専門機関、行政等の互いのできることの連携と応援、業務の相互理解を重要とし、活動を続けていきたいと考えます。

画像は活動のほんの一部です。例年、自分たちの思いや行事の報告を、1000部の冊子にして無料配布させていただいています。自分たちで動かしてきた活動です。手の回らないことの方が多く、走り抜けてきた感があり、今後の為に団体組織を整え始めました。

足立区の職員研修にも携わること数回あり。まだまだ、これからと考えて気持ちを新たに応募に踏み切りました。

任意団体「がきんちょ」ファミリーでの地域の子育て支援活動から2018年あだち子ども支援ネットとして子育て支援、ヤングケアラー、母親支援、里親、中途養育者支援、専門職・多機関・大学関係者の仲間と共に一般社団法人化しました。法人化と共にコロナ禍となり、こども食堂・地域食堂を困窮・困難家庭への家族分の弁当・生活見守り支援に切り替え、年間50回以上130食平均の弁当と元気確認、相談体制、シェルター一時保護、行政・関係機関へのつなぎ等に奔走。

それだけの地域の活動をするための地域での関係機関を巻き込んだ「井戸端会議」や法人化してからは、足立区内外の関係機関、専門職のみなさんとの交流、調整、連携会議を休みなく継続。毎回30名を超える連絡調整会議に発展。

長い地域活動への援助は、東京ボランティア市民活動センターゆめ応援はじめオリックス宮内財団、第4回・5回子供の未来応援、足立区公益活動げんき応援事業助成、足立区子供の未来応援助成採択活動。

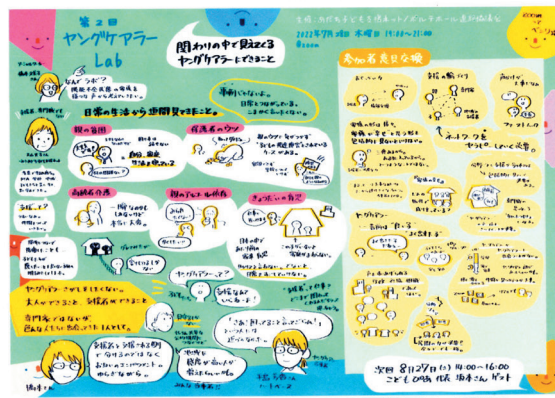
第2回 ヤングケアラーLab 開催報告

「関わりの中で見えてくるヤングケアラー」にできること

2022年7月28日 木曜日 19:00~21:00 @zoom

難しい話しようとしているわけではない。
現実を知って、生き方を考えたいだけ。そして、そんな思いをもてる仲間を増やしていきたいだけ。
今後は、はじめて生き方を探っている生活がある話をした。
年寄りのできること。
みんな、ハッピーになりたいけど一色なことあって悲しくてつらくて、でも、日々やらなきゃならないことの繰り返しを繰り返して生きていく。
どうしたらいい?
声に出したら、聴ってくれるのはこれ!

だから、言えない。
こんな状況を改善するには、どうしたらいい?
を考える
「ヤングケアラーLab第2回」



次回はこちら>>>
2022年8月27日(土)
14:00~16:00
@zoom

開催前日にはzoomURLを公表
事前参加申し込み、問い合わせ
メールdomannaketto@gmail.com

ヤングケアラーLab HPIはこちら
<https://9fe1.jp.peraichi.com/>



第1回のチラシはコチラで
見ることができます



子ども・障害・介護・貧困すべての家庭を含むあだちシステム

生きるプロジェクト

- ① あだちにあったフォーマルな社会資源とインフォーマルな社会資源の活用
- ② 子どもと家族を取り次ぐソーシャル・サポートネットワークと既存の社会資源の活用を促す。
- ③ 支援する者とされる者が好意し、ネットワークのつながりが強化・進化

地域共生社会

あだち子ども支援ネット

すべての家庭が
切れ目なく受けられる

すべての家庭を取り巻く
地域資源と社会資源の融合を!

「だれも とりにぼさない」
困りごとに手が届いたか?

ネットワークを利用した支援、見守り、
寄り添いができたか?

こちやまぜまづくり

- ①「食」
 - ②「学び」
 - ③「暮らし」
 - ④「遊び」
 - ⑤「文化」
- ・公式ライン・メール
・オンラインの活用
・対面での顔合わせ
・場づくりと企画の実行

コネクトリンク勉強会

コネクトリンク勉強会とは
地域共生社会の実現に向けて
様々な課題を共有し、学びあう場です。
2022年より開催する「コネクトリンク」は、
地域共生社会の実現に向けて
様々な課題を共有し、学びあう場です。



コネクトリンク勉強会⇒コネクトリンク Labへ

第11回



健康寿命を
のばそう!
AWARD
優良賞

受賞者名

NPO法人ゆめ・まち・ねっと

取組タイトル

「冒険遊び場たごっこパーク」「子どものたまり場おもしろ荘」
「みんなの家むすびめ」など

所在地 〒417-0071 静岡県富士市国久保1-7-15 電話 070-6552-3644

ウェブサイトURL <http://yumemachinet.web.fc2.com/>

取組課題 基盤課題B「学童期・思春期から成人期に向けた保健対策」
基盤課題C「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」
重点課題①「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」
重点課題②「妊娠期からの児童虐待防止対策」

子どもたちが自由に遊べる環境を

2004年、子どもたちが自由に遊べる環境づくりを始めました。子どもに関する行政の取り組みで、不足しているのが、子どもの遊び場づくりだからです。公的な子ども施策は、教育と福祉が中心です。でも、子どもが豊かに育つために何よりも大切なものは、「外遊び」です。



遊びを奪われた子どもたちに遊び場を返そう。そんな思いで04年12月、「冒険遊び場たごっこパーク」を始めました。愛称の由来「田子の浦港」に近い公園と川で隔週末に開催。川遊び、木登り、泥遊び、たき火…そんな遊びに興じる子どもたちの姿があります。

大縄跳びをしていた小学生たちは、高校生が加わると、勢いよく縄を回しました。高校生の運動神経の良さに合わせたのです。自閉症の幼児が近付いてきたときには、縄をだらんと垂らしました。幼児は一度だけその縄をまたぐと、満足そうな様子でいつもの一人遊びを始めました。臨機応変な遊びの展開の中でこそ培われる社会性は、学校教育では決して得られないものです。

子育て応援の試みの挫折

05年から08年まで、「ガキンチョ団」という学童保育型の会費制活動を実施。学童保育の子ども本位ではない活動実態を知ったからです。子どもたちは指導員から「あれはするな」「これはダメだ」と「指導」されてばかり。安心・安全な預かりが目的で、単に就業支援施設にしかっていない現状。子育て支援は子どものためにあるべきだと、「ガキンチョ団」を開始。川でザリガニを捕ったり、浜で焼き芋をしたり、ハチャメチャな遊びの時間を提供。それでも、就労後に迎えに来る親はそんな遊びに関心がなく、「早く帰るよ」と引き揚げてしまいます。誰の何を支援しているのかと悩み、「ガキンチョ団」を閉じました。



遊び場づくりから居場所づくりへ

その後、11年3月に「子どものたまり場おもしろ荘」を開き

ました。空き店舗をリフォームし、放課後の子どもたちが自由に過ごせる居場所にしました。答えを丸写しして宿題を片付ける小学生、駄菓子を食



べながらマンガを読む中学生、スマートフォンを片手におしゃべりする高校生……。子どもたちが思い思いに過ごしています。

「たごっこパーク」と「おもしろ荘」には、共通の特徴があります。「子どもの生活圏での開催」「参加費無料」「親の申込み不要」「年齢制限なし」で、18歳以上でも、障がいがあっても、不登校でも参加できます。イベントはあえてやりません。いつ来て、いつ帰ってもよく、遊ぶのも自由、遊ばないのも自由。こうした場の提供が家庭や学校に居場所を見いだせない子どもとの出会いにつながりました。

人里離れた有料野外教育施設では、親の送迎、主催者への申込みが必要となります。子どもの生活圏での参加費無料の場なので、生活困窮家庭や不適切な養育家庭の子どもも遊びに来ています。

イベントがないので、学校や公共施設が求めがちなみんな一緒に美しいとされる場面を苦手とする子どもにも、居心地のいい場所になりました。「30分でこんな形に仕上げましょう」という大人の期待通りに課題をこなすことが困難な子どもも常連になりました。遊び方は自由なので、独創的な遊びを一人黙々とする子どもや、大人の許容範囲を超えてハチャメチャに遊ぶ子どもが集う場にもなりました。

支援ではなく、共に生きる

「特別な支援」や「社会的養育」が必要だといわれる子どもたちとの出会い……。これは、活動を始めたころには、強く意識していないことでした。でも、自由な外遊びの場や居心地のいい放課後の遊び場が子どもたちの居場所になり得たことで、生きづらさを抱えた子どもたちに次々と出会うことになりました。僕はそこに自分たちの使命があると感じ、そうした子どもたちと日々を重ねることに市民活動の意義を見いだしていきました。

活動の中で、不登校児支援、障がい児支援、貧困家庭支援といった看板は掲げていません。そこに特化するほどの専門性を持ち合わせていないことが大きな理由です。でも同時に、「支援」という言葉に「支援する側・される側」という一方通行な関係性を生むような揺らぎを覚えるからでもあります。そんな「〇〇支援」の看板を掲げていないからこそ、「支援機関」のネットワークという網目からこぼれ落ちる子どもたちと出会えたのかもしれない。